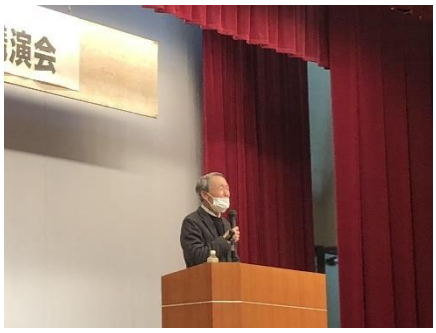
開催日時	令和 4 年 1 月 18 日（火）　13:30～15:00
開催場所	京田辺市中央公民館大ホール
語り部	宮本英一　　（千葉県旭市）
参加者	自主防災組織、区・自治会の長もしくは防災担当者、災害ボランティア登録者、京田辺市議会議員、防災士、市職員　約 100 名
開催経緯	・自主防災組織の活動について、組織はしているものの、事実上活動があまりできていないところが多い。 ・指定避難所までの距離が遠い地区があり、避難所の確保が課題 ・大きな災害を経験していないため、危機意識が低下していると感じる ・公助への期待が過大である ・女性視点の防災について、対応が不十分
内容	（1）旭市における東日本大震災の記憶 千葉県旭市は、九十九里浜の東端にある市である。千葉県の北東に位置し、漁業が盛んな町として有名。旭市は、東日本大震災によって 14 名が亡くなった。津波は計 3 回訪れ、堤防を越えた津波で流されたケースが多い。津波の到達距離は 200 から 300ｍであり、旭市全体が襲われたわけではない。震源地の東北地方で起きた津波とは比べられない規模だが、震源地から遠い千葉でも津波による大きな被害があったことは知ってほしい。 九十九里浜は東北地方のリアス式海岸と違い、広い海岸である。そのため大きな津波は来ないと思い込んでいた。小学校の授業でも「大きな津波はリアス式海岸で起こるもの」と聞いた記憶がある。1 回目の津波は堤防を越えなかったものの、2 回、3 回と続いた津波は堤防を越えた。堤防付近で清掃活動をしていた私と妻は、津波にのみ込まれた。私たちはとっさに家の脇に隠れたものの、反対側の道路へと押し出された。 その後、運良く漂着物にしがみつくなどして難を逃れることができたが、濡れた寒さで震えが止まらなかったことを憶えている。なお、発災直後からその後の復旧までは、防水タイプの携帯電話が非常に役立った。 （2）区長として復旧作業に従事 旭市は、平成 17 年に 1 市 3 町で合併してできた市である。私が住んでいる旧飯岡町は、海岸近くに人口が集中していたため、被害が一番多かった。しかし、津波の到達距離の関係で、町内のたった 90 軒程度の中でも、被災した人と被災しなかった人に分かれた。そのため、家から泥を掻き出す作業をする人もいれば、ゴミを出す日の確認といった日常寄りの声も私のも

	とには寄せられた。 　主に寄せられた声としては、「被災した家を壊すのに補助金は出るのかどうか」、「解体業者の当てはないか」、「家の前の道路の瓦礫をどかしてほしい」等々。相談がある都度、市への連絡や、現場確認を行った。 　県外からのボランティアも多く集まってくれていたが、ボランティアの安全確認のために活動時間に制約があったり、受付処理が煩雑だったりと、当初はまとまった活動がしづらい状況にあった。これらの問題については、被災状況を視察に来た市長や担当課長に直接お願いをして、解決をはかった。 （3）避難所の状況 　避難所で最も困っていたのは、トイレ関係。断水で水が流せなくなった。簡易トイレも併用したが、高齢者や障害者には使いづらいものだった。 また、当時は避難所の運営がおぼつかなく、誰が現場指揮を執るのか曖昧だった。今は運営マニュアルを用意している。 災害時には、市民も、職員も等しく被害を受ける。発災時に自分の家族を守りながら、どう地域のために行動をとるか。日ごろからよく考えておくべきだと思う。 
開催地より	区として防災グッズを購入しているが、冬に必要なものは不足していると感じている。来年度は、灯油ストーブ等の検討と暖かい食等を考えていきたいと思う。 　また海に面していないため津波の被害の心配はないが、木津川が氾濫した場合の対応をどうするかと考える場合の参考になった。